

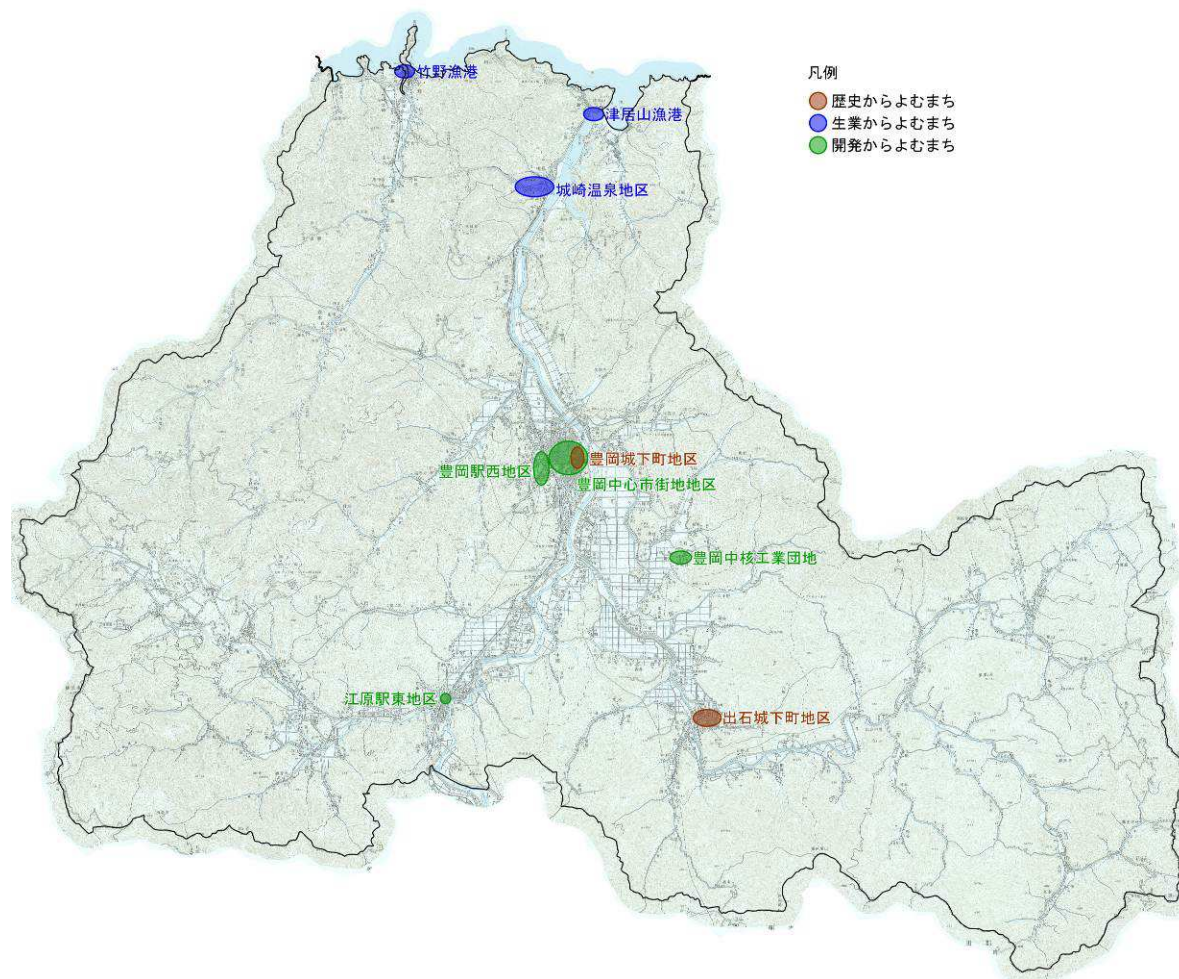


図 2.12 代表的なまちの位置図

1) 歴史からよむ景観

縄文時代から人が住み、山の稜線に古墳が残る豊岡では、古い歴史を持つ集落やまちは多いですが、現在の景観に歴史性が現れている町は多くはありません。そのなかで、近世城下町の土地利用と町割りが現在の景観の基礎となっているのが、出石と豊岡です。城や城山は城下町の歴史を端的に示す歴史的資源であり、今に残る街道とまちの配置からはまちの歴史的構造が読み取れます。また、建物が建て替わり用途が変わっても、武家地や寺町、町人地といった城下町の基本的土地利用のまともりは継承され、それぞれに特徴のある町割りや敷地形状が継承されています。城下町が形成されてからの長い時間のなかで、町の営みが変化することで建物や生業が変化しても、道のかたちや土地に残された歴史的基盤は生きています。

①出石城下町地区

出石町の歴史は古く、「古事記」や「日本書紀」にも地名が記されています。室町時代に山名氏が此隅山や有子山に城を築き繁栄を極めました。慶長9年に小出吉英がこいでよしふさが

有子山の山麓に城を移し、城を中心に町割が整備されて、上級武家屋敷地を取り囲むように内堀を巡らせ、その外に町人地、さらにその外側に旧出石川と谷山川を挟んで下級武士の町が置かれました。

出石城下町は、明治9年の大火により多くの家屋が焼失しましたが、江戸時代（文化7年）の出石城下町絵図と比べるとわかるように、間口が狭く奥行ある宅地形状や道の形は今も変わっていません。敷地規模の大きい武家地では公共施設が建てられていますが、町人地では現在も江戸時代の町割に沿って、赤土色や鳥の子色の土壁や白漆喰の壁面に黒やいぶし銀の瓦屋根の町家が平入りで建ち並び、その外縁部に社寺が集まっています。この家並みと有子山など周辺の山並み、谷山川などの河川とが一体となり「但馬の小京都」と呼ばれる風情を生み出しています。

城下の中心部の約 23.1 ha は、全国的にも数少ない貴重な「城下町」として重要伝統的建造物群保存地区に選定され、伝統的な建造物群および、これと一体となって歴史的環境を形成している出石城跡や樹木、生垣などの保存を行なっています。

近年は、近畿で最古の芝居小屋である永楽館^{えいらくかん}が復原され、酒蔵や寺社の改修も進み、歴史的景観資源の保全整備が進んでいます。また、城下町を見下ろす出石城跡の整備も行なわれ、瓦屋根が続く家並みや町割が見える見下ろし景観が意識されています。

江戸時代には一般の町民が城内に入るとは許されていませんでしたが、旧暦2月の最初の午の日に藩主が城の大手門を開放して城内の稲荷神社に参拝を許したことに始まるとされる初午大祭や、大名行列で参勤交代の模様を今に伝えるお城まつりがあり、毎年盛大に行なわれます。こうした祭りのためのしつらえや都市空間が維持されることが景観の保全につながります。

出石の歴史的町並みの魅力は名物の皿そばとともに多くの観光客を呼び込んでいます。出石の人々は、この歴史や伝統・文化のある落ち着いた城下町に深い愛着と誇りを持って暮らしています。歴史性が色濃く残る出石城下町の景観は、文化財としての価値だけでなく、それが美しく、地域の人々の誇りであるからこそ大切に受け継いでいく価値があります。



文化7年 出石城下町絵図



江戸時代の町割りが色濃く残る出石城下町



多くの観光客で賑わう大手前通り

②豊岡城下町(城南町から元町)

16世紀末に宮部善祥^{みやべぜんしょうぼう}房^{じんむ}が神武山に亀城を築いた後、京極高盛^{きょうごくたかもり}が山麓に居を構えて豊岡城下の整備を進めました。神武山の北麓に宵田口^{よいだ}から山王山^{さんのう}に至る水壕に囲まれたあたりに藩の行政施設や武家地を配し、その外側で円山川に沿って南北に町人地が整備されました。街道と水運の結節点の位置し、宵田町(中央町)^{なか}・中町(元町)^{しも}・滋茂町(元町)には多くの商家が並んでいました。

この近世に成立した城下町は、大正期の円山川の河川改修により川との距離が遠くなり、大豊岡構想を実現する耕地整理により武家地の一部の町割りが改変されたものの、現在も城下町の基本的な町割りは維持されています。

京極家のある辺りは城下町の風情が残っていますが、敷地規模の大きい武家地は公

共施設が建てられたり、分割されて戸建て住宅が建ったりしていますが、塀や柵ごし見える庭木の緑が彩る通り景観には武家地の面影が残ります。町人地では、町家の多くが建て替わったり看板建築となって、伝統的な町家の並ぶ町並みは失われていますが、間口が狭く奥行のある宅地形状は維持され、軒線が続く通り景観のまとまりが見られます。

わずかに残されたイトの痕跡や屋敷周りの玄武岩の石積み、町家の構成を残す民家などを歴史的資源として見直し、あわせて町割を継承することで建物が建て替わって景観の歴史性を伝えていくことができます。



元禄 15 年 豊岡城下町絵図



城下町の面影を残す通り(京極家付近)



城下町のメインストリート(宵田通り)

2) 生業からよむ景観

商店が並ぶ地域と町工場が集まる地域では風景が違いうように、地域の営みや生業によって建物の形態や規模、道や立地条件など異なり、それが景観を特徴づけます。豊岡のなかで、古くから自然条件を活かした生業によって独特の景観が形成されているまちのひとつが城崎温泉町です。ほかには、漁港を中心に形成されてきた港町、街道や水運の拠点に形成される町などもみられますが、社会経済状況の変化により、色合いが薄れてきているところもあります。また、近代産業や商業も新たな生業といえます。

①城崎温泉地区

三方を山に囲まれた狭い谷間に位置する城崎温泉では、周囲の山が近くに迫り、宿の窓からも屋根越しにも山の緑が見えます。まちの中心を流れる大谿川に沿って、木造2階建てや3階建ての温泉宿や店が高密度に建ち並び、温泉情緒豊かな和風の趣が感じられます。

この城崎温泉は1,400年の歴史をもち、コウノトリが足の傷を癒したことから発見されたと伝えられる「鴻の湯」、8世紀に^{どうちしょうにん}道智上人の千日行で湯が湧いたとされる「まんだら湯」、鎌倉時代の「御所の湯」、江戸期の「一の湯」「柳湯」「地蔵湯」と開湯され、広く知られるようになりました。古くから但馬の湯として親しまれていましたが、大正14年の北但大震災により壊滅的な被害を受けました。幸いにして泉源に大きな被害がなかったことから、まちが一体となって復興まちづくりを進め、昭和10年には外湯を中心とした現在の城崎温泉の骨格が整備されました。このときに、玄武岩を積んで大谿川の護岸を高くし、王橋など弓形橋が架けられ、河岸に柳や桜が植えられました。玄武岩の深い黒灰色の色合いと河岸の柳の緑が織りなす現在の大谿川の水辺景観は復興景観でもあります。

また、「歴史と文学といで湯の町」とも呼ばれ、古くから^{しがなおや}志賀直哉や^{ありしまたけお}有島武郎をはじめとする多くの文人や墨客達が訪れています。まちへの玄関である駅から大谿川への道、温泉町の賑わいの中心となる大谿川沿い、裏通りの落ち着いたきのある木屋町通りなどでは、浴衣を着た多くの温泉客が外湯めぐりを楽しんでいます。主な通りでは、特産品の津居山かにや麦藁細工などが販売され、外湯めぐりと特産品巡りで、そぞろ歩きの似合う人間サイズのまちでもあります。これからも人々が温泉町としての営みを続け、外から来る人々にその営みとの折り合い方を伝えていくことで、まちの風情が継承されていきます。そのために町並みの保全に取り組む活動が続けられています。

280年以上も前から続く秋のだんじり祭りのときには、温泉町の風景は一変します。数百人の勇壮な男たちが操るみこし台と大だんじりによる最後の激しい「せり」が、一の湯前の王橋で行われます。こうした祭事の風景もまた、まちの景観です。



夜の外湯めぐり(一の湯)



浴衣の似合うまち(大谿川通り)



勇壮な城崎だんじり祭り

②竹野・津居山漁港

豊岡には主な漁港として竹野と津居山があります。海と山に挟まれた小さいながらも港町が形成されています。港に出れば漁の時間に応じて漁船が集まり、まちでは潮風と海の気配が感じられます。いずれも近接して集落が形成され2階の階高が高い下見板張の家が密集し、家の間を細い道が海に抜けいきます。せりの声、漁具の手入れや水揚げされた魚の選別、イカの天日干しなど、漁港での営みが景観を特徴づけます。

竹野漁港は、県最北端の猫崎半島の付け根で竹野川が日本海に注ぐ広い三角州性低地の河口に位置しています。竹野浜では、室町時代から製塩が行なわれていましたが、江戸末期から北前船で他国の塩が多量に入ってきたことなどから見られなくなりました。竹野漁港は、漁船の大型化などに対応するための整備が昭和25年にはほぼ完成し、昭和52年には竹野浜海洋センターや漁業協同組合事務所などの施設も建設されました。

津居山漁港は、津居山湾と呼ばれる円山川の河口に位置し、津居山の東側のわずかな場所に北但大震災後の復興区画整理事業により集落が形成されています。区画整理とはいっても海に抜ける細い道が通り、漁村集落らしい街区が形成され、木造家屋が密集しています。浜辺には大小の漁船が接岸しています。津居山港では多くの鮮魚が水揚げされますが、冬に水揚げされるズワイガニは「津居山かに」と呼ばれ、冬の味覚となっています。



多くの漁船が係留されている竹野漁港



漁具の手入れをする日常の漁港



津居山と家並みが特徴的な津居山漁港



活気ある津居山かのにの初せり

3) 開発からよむ景観

豊かな景観は守り育むだけではなく、新たにつくるものでもあります。戦前の鉄道駅の開業とあわせた駅前通り沿道の市街化促進に始まり、計画的開発で市街地を拡大し、賑わいのあるまちを整備してきた歴史があります。戦後は、モータリゼーションに対応した道路や交通結節点の整備、拠点となる駅前の開発整備、商店街や工業団地などの産業機能の誘致、住宅地開発などによって、新たな市街地景観が生み出されています。

①江原駅東地区

神鍋高原への玄関口となる JR 江原駅の東側に位置する本地区は、明治 42 年に紆余曲折の上に設置された山陰線江原駅の開業が発端となり誕生しました。昭和 3 年に神鍋山でスキー大会が開催されて以降、冬には多くのスキー客が神鍋高原に向かうために鉄道で本地区を訪れ、たいへんな賑わいを見せました。

しかし、その後の自動車交通の発達により、鉄道から自動車へ交通手段が変化したことなどから本地区を訪れるスキー客の数が減少したことや、主要な公共的施設が江原駅の西側に移転されたり、新設されたことなどにより、日高町の中心市街地としての賑わいが徐々に失われていきました。そのため、住民自らがまちの活性化を図り、

住民が愛着をもって定住し、快適さや豊かさを実感できるまちを実現するため、平成13年に沿道区画整理型街路事業等により、江原駅東側の駅通りを中心に高原リゾート地をイメージしたまちなみが造られ、日高町街並み景観形成地区に指定されています。

駅前広場を含めた建物全体の形態意匠は、ハーフティンバー風のデザインで4階建てまでとし、まちなみの連続性を保つとともに外壁の後退や色彩について配慮がなされています。また、日高らしさを創出するため、建物の壁面などには阿瀬子持ち石が積極的に使用され個性溢れる景観となっています。

地区中央部の道路幅員は18mもあり、歩道には植樹帯や花が植えられたプランターなども設置されたゆとりと緑ある空間で、広い高原リゾート風のイメージを演出しています。



JR 江原駅東の駅前広場



ハーフティンバー風にデザインされたまちなみ

②豊岡中心市街地

豊岡の中心市街地は、山陰線の開通による豊岡駅の開業、大豊岡構想にもとづく円山川の河川改修と区画整理事業（耕地整理）によって整備されてきました。

明治42年に豊岡駅が開業し、駅前から円山川に至る通り沿道の市街化が期待されましたが、大正に入り店舗が立地するようになったもののそれほど集積しないまま、北但大震災（大正14年）により大きな被害を受け、震災復興として大豊岡構想が推進されました。区画整理事業では、東西南北方向に格子状に道路が計画される中に、駅から寿ロータリーを経由して円山川の堤防沿いに再建される県道に至る斜めの道路が計画されました。放射状道路の通る街路整備とあわせて、上水道の整備など都市の骨格づくりが進みました。

このとき大開通りが整備され、その中央にシビックセンターとして町役場や公共施設を集中させ、公設市場もつくられ、都市の中心として位置づけられました。戦前の大開通りにはプラタナス並木が続き、但馬の中心商業地として賑わいました。戦前までは、この大開通りと城下町からの商業地である宵田通りが中心であり、鉄筋コンクリート造の洋風モダンな復興建築が多く建てられました。区画整理事業は、現在の北

近畿タンゴ宮津線付近まで区域に入っていますが、復興で市街化したのは、大開通りから豊岡城下に至る現在の中心市街地のエリアです。

現在も、多くの復興建築が残り、アーケード越しにかつての町並みを見ることができます。また、区画整理事業による敷地は町家敷地の形態を継承しており、それが商店街の景観の基本となっています。しかし、郊外のロードサイドに大規模小売店舗の出店が増加し、中心市街地への来客数の減少や後継者不足などから、空き店舗や空き地が増加して商店街の賑わいが失われつつあります。

豊岡駅周辺の開発や総合健康ゾーンの整備、旧本庁舎を活かした新庁舎の建設等においては、こうしたこれまでの豊岡中心市街地に見られる先進性やデザイン性を継承することが、景観創出における課題となります。

また、近年、散在的に高層建物が建てられるようになってきているなかで、盆地の中心に位置する市街地から周囲の山並みへの見通しやコウノトリの舞う空の広がりや調和するまちのスカイラインなど、新たな課題がでてきています。



耕地整理により造られた貴重な寿ロータリー



震災復興のシンボルである豊岡市役所旧本庁舎

③豊岡駅西地区

豊岡駅西地区は、豊岡駅に近接することから昭和 50 年代から農地の中に小規模な宅地開発が行われるなど、定住人口が増加してきたにも関わらず、都市基盤が未整備で今後の土地利用転換の方向が示されないまま、散発的な宅地開発が続いていました。

そこで、駅に近い良好な住環境の市街地整備を目指して、豊岡駅西側の^{たかや}高屋から^{とべら}戸牧に至る約 34.5 ha のエリアを対象に「駅西戸牧土地区画整理事業」および「^{しょうぼうじ}駅西高屋・正法寺土地区画整理事業」を実施（平成 2 年～平成 15 年）しました。この事業により、豊岡市中心市街地の外環状線となる都市計画道路^{いまもりたかやしもかげ}今森高屋下陰線や駅東西連絡道などの幹線道路とともに、地域の宅地利用を促す区画道路整備や公園が整備されました。

当初は、山裾と鉄道までの狭い地域に耕作地と住宅が混在する風景が続いていましたが、平成 17 年に豊岡病院が戸牧地区の丘陵地に移転し、急速に住宅等の建設が進みました。土地区画整理事業により道路や公園をつくることで利便性や安全性は向上し

ましたが、これからは良好な住宅地になるようひとつひとつの住まいの建て方や緑化などが大切になってきています。

また、外環状線として整備された今森高屋下陰線沿いには多くの店舗が立地しています。市街地整備と調和のとれた幹線道路の景観づくりも課題です。



JR 豊岡駅西口の潤いある駅前広場



今森高屋下陰線沿いに立地する店舗

④豊岡中核工業団地

但馬モデル定住圏計画における主要プロジェクトとして計画された豊岡中核工業団地は、本市を中心とした地域経済の発展を目的として事業が開始され、平成4年に整備が完了しました。市中心部から南東へ約6kmの比較的緩やかな丘陵地の約90haを造成し、山に包み込まれた谷合い部を中心に工場用地が整備され、現在23社の企業が進出しています。

造成にあたっては、工業団地の中央にある道路に街路樹を配置しているほか周辺の緑と調和するよう造成面積の約40%に緑地を確保するなど、周辺と調和した整備が行われています。また、工業団地に立地する建築物は、背後の山並みを遮蔽しないように建物の高さが低く抑えられ、前面の田園と背後の山林に溶け込んでいます。



周囲の山林に包まれた豊岡中核工業団地



前面の田園や背後の山に溶け込む
豊岡中核工業団地

3 まちやさとをつなぐ川と道

豊岡では、円山川などの河川や国道 312 号などの道路が集落とまちの生活や文化、生業などをつなぐ重要な要素となっています。

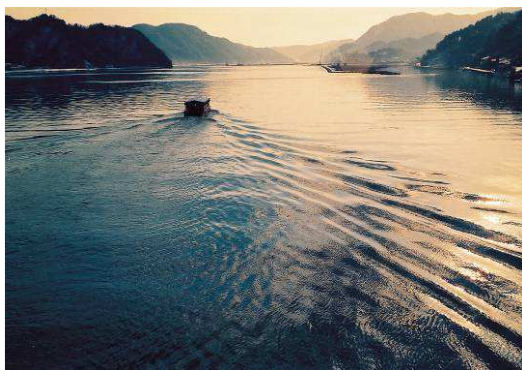


図 2.13 主な河川と道路の分布

1) 河川

山が多く峠の多い豊岡では陸上交通の発達は至難であったことから、大正初期頃までは水運により荷物を運ぶ高瀬舟や城崎温泉の湯治客を送迎する湯嶋舟などが円山川や出石川、竹野川を往来し、河川は人や物を結ぶライフラインとして賑わっていました。円山川は、川幅が広いため橋をかけず川を横断する手段として集落に渡し場（いと）を設け、渡し舟により人々を運搬していました。玄武洞の渡し舟やイトの跡は今も残っており、やわらかい川風に吹かれながらのんびりと進む屋形船も、円山川の情緒を代表する景観です。

円山川や竹野川、出石川などの水運は姿を消してしまいましたが、河川堤防上には道路が造られ人々の生業や生活に利用されています。また、河川はウォーキングロードやサイクリングロードとしても利用され、河川敷には運動公園や親水護岸などが整備されてスポーツや憩いの場として多くの人々に親しまれています。



穏やかな川面をゆっくりと進む屋形船(円山川)



川辺で遊ぶ子どもたち(六方川)

2) 道

道路は、広域的に都市や周辺市町をつなぐと共に市内の集落やまちをつなぐ重要な公共施設です。20 世紀の自動車交通の発達や大規模な河川改修、あるいは耕地整理や区画整理により道路の形態は著しく変化してきました。しかし、古くからある集落内の道や旧街道などでは、沿道のまちなみなどに今でも当時の面影が色濃く残っている箇所があり、地域の良好な景観を形成しています。



円山川沿いの道路(豊岡瀬戸線)

国道 312 号・426 号・482 号などの主要な道路の多くは、主要な河川である円山川や出石川、稲葉川などに沿ってつくられ、地域をつなぐ道として多くの人や物資の移動

に重要な役割を果たしており、田園や集落、川、山並みからなる地域固有の景観が楽しめます。また、市域の中央に広がる六方平野（六方田んぼ）や国府平野などには、営農を支えるためにつくられた幹線農道が走っており、広がりのある大規模な田園景観が形成されています。

道路の配置は、豊岡盆地の中心市街地から広がり、山沿いの集落を経由して狭い山間の谷筋まで枝状に伸びています。特に但東町では積雪が多いため、住民の協力により除雪が行いやすいよう集落内の道幅が広くつくられており、ほとんどの道が峠を越えて他の地域へとつながっています。また、断崖絶壁の山陰海岸に開通した但馬海岸道路は、当時の難工事を今に伝える風景となっていますが、日本海の雄大な眺めを望むことができ、観光や海際集落を結ぶ生活の道としてもたいへん重要な役割を果たしています。

3) 海岸

山陰海岸には、はさかり岩や淀の洞門などの奇岩、洞窟、洞門など貴重な波食地形の地質資産があり、環境省の「快水浴場百選」「日本の渚百選」に選定された竹野浜海水浴場や気比の浜海水浴場、切浜海水浴場などがあり、夏には多くの海水浴客が訪れます。

竹野港や津居山港は、江戸中期から明治末期までの約 100 年間は大量に人や物を運ぶことができた北前船が入港してたいへん賑わいましたが、明治 45 年の山陰線などの鉄道開通により姿を消していきました。道路を造ることが困難であった断崖絶壁の海岸線にも、古くから水運などにより半農半漁の生活を営んでいた竹野町宇日や田久日などの特徴的な集落が形成されています。



断崖絶壁が続く山陰海岸

2.3 景観の意味を伝える記憶や物語 ～人々の記憶に残る風景～

私たちは、かつてコウノトリが自由に大空を舞いオオサンショウウオなどの多種多様な生き物が生息する豊かな自然環境の中で、悠然と暮らしていました。その後の高度経済成長に伴う環境破壊や生活様式の変化などにより、山は荒れ、川は汚れて生きものは数を減らし、コウノトリは昭和46年にこの豊岡の空を最後に日本の空から姿を消してしまいました。しかし、関係者の長く粘り強い努力により、平成17年に5羽のコウノトリが再び豊岡の空に羽ばたきました。私たちは、この絶滅と再生の歴史からコウノトリの生息を支える豊かな自然環境や文化こそが、人にとっても素晴らしい環境であることを実感し、コウノトリも暮らすことができる環境が豊岡の風景の特徴として人々の記憶に生きついています。

景観は、基盤となる地形的、自然的要素と人々がその中で暮らし築いてきた歴史や伝統、文化、生業などの「生活的要素」が、密接に関わりながら重層的に形づくられるものです。このことを「豊岡、風景のものがたり」として捉えることができます。

以下の私たちの記憶に残る豊岡らしい風景を私たちみんなの資産として大切に守り育てる必要があります。

1 神話からみる風景の成り立ち

豊岡の地形の成り立ちを説明する「^{あめのひばこ}天日槍の国開き伝説」は特に有名で、次のように言い伝えられています。

^{しらぎ}新羅の国の王子である天日槍命を乗せた船が但馬の国、気比の村に流れ着きました。天日槍命は来日岳に登り、裾に広がる沼地の奥に緑美しい村を見つけました。そこは出石という村でした。出石の大村長は天日槍一行を温かく迎え入れ、田や畑を分け与え、一緒に楽しく暮らし始めました。



そのころ円山川は瀬戸の^{せと}ところで固い岩盤でさえぎられており、出石も豊岡盆地も水に沈んでいました。水は但馬平野一帯によどみ、少しの出水でも洪水となり、農民たちはたいへん困っていました。天日槍は、なんとかこの地を開拓して良い田が作れないものかと考え、村人たちの協力のもと長い年月をかけ瀬戸の大岩を切り開いて水を海へ流し出しました。すると大地が顔を出し、人々は手を取り合って喜び、天日槍は国づくりの神として出石神社に祀られました。

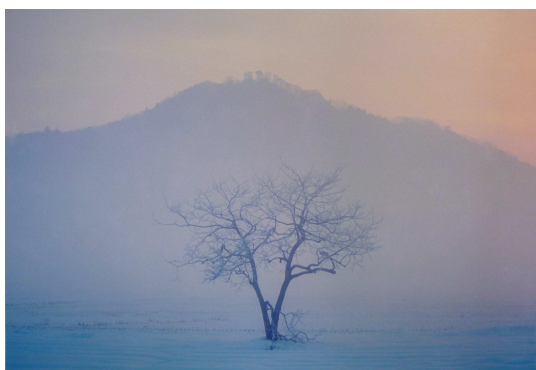
2 小学校の校歌にみる風景

豊岡は中央の盆地を山が囲み市域の約8割が山地であることから、どこから見ても必ず山が望めます。また、同じ山でも地域の背景や眺める時期、視点場などによってその風景は様々に変化します。

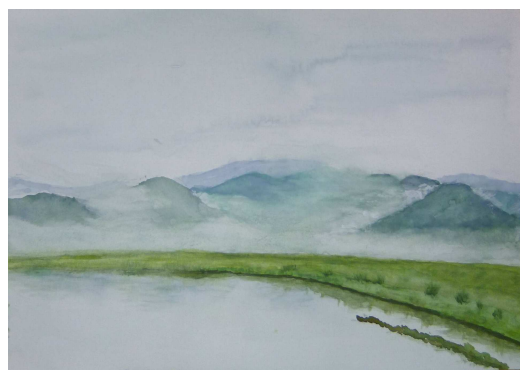
山は、豊岡の景観の骨格を形成する重要な要素であり、来日岳や但馬富士と称される美しい山容の三開山、三方富士と呼ばれる鶴ヶ峰^{つるがみね}など多くの山々が、地域のシンボルとして小学校校歌の中に謳われています。また、川も多く謳われており特に豊岡を代表する円山川は、地域と重要な関わりがあることがわかります。私たちは美しく流れる川の様子を背景である山を重ねることにより、情緒ある風景として思い起こすことができます。さらに、校歌に謳われている田園は、四季折々に変化する農村の風景として思い浮かべることができます。

このように校歌の中には、学校の歴史、校訓などとともに、山や川、田園など、地域が大切にしている多くの風景が盛り込まれています。校歌を歌うことで、普段見る山や川が特別な山や川となり地域自慢の風景であるというのが再認識されます。

したがって、校歌に謳われている山々や川などの風景は、人々の子供のころからの記憶であり、誰もが共有している、あるいは共有することができる地域の大切なシンボルです。ゆえに、古き時代から変わらない風景であり、変えてはならない風景です。



幻想的な但馬富士(三開山)



円山川の朝霧に幾重にも重なる山並み

3 コウノトリと共に暮らす風景

円山川の出石川が合流する豊岡盆地の南端付近から河口までの約16 Kmは、ほぼ勾配がないため低湿地状の土地が多く、湿地で餌を採るコウノトリの生息にも適した環境が生み出され、かつて人々は但馬牛やオオサンショウウオなどと共に悠然と暮らしていました。

近年は、ビオトープ水田や「コウノトリ育む農法」などの農薬や化学肥料に頼らない環境創造型農業が進められ、田んぼにはトンボやドジョウなど多様な生き物が生息し、かつてのように自然と共生する人々の暮らしや田園の中で子どもたちの遊ぶ風景が戻ってきました。

特に、円山川の河口付近に位置する城崎町戸島の「ハチゴロウの戸島湿地」は、日本海や楽々浦湾からの汽水、上流からの淡水、山際からの湧水などが混在する場所で、コウノトリの生息拠点や地域の生物多様性の核、あるいは環境教育の拠点となっている生態系の宝庫です。



自然と共生していたかつての暮らしの風景
(提供: 富士光芸社)



コウノトリと四季が移り変わる田園や山並み



多様な生き物が生き生き暮らす風景



きれいな水にしか住めないオオサンショウウオ

4 地域の風土を支える歴史・伝統・文化の風景

豊岡の各地には祭りなど様々な伝統行事が多く残っており、先人から引き継がれ現在もなお地域の生活の一部となっているものも多くあります。

祭りやイベントは、観光客の誘致により地域に賑わいを創出する目的もあり、地域の絆を深め、風土を支えるといった要素もありますが、日常とは違う風景が創造されます。

本市の祭りは、特産「杞柳・かばん産業」の守護神である柳の宮のまつり、城崎温泉のだんじり祭り、江戸時代の参勤交代の様子を伝える出石お城まつりなどが有名ですが、長さ約1.5mの大わらじと大ぞうりが神木に神の履物として奉納され、無病息災を願う日高町田ノ口の「賽^{さい}の神まつり」や但東町赤野^{あかの}の「太刀振り」など、各地区で独特の伝統行事が多く継承されており、行事当日は伝統的な風景に変わります。

また、多くのイベントも開催され、船上から打ち上げられる竹野海上花火大会、全国からランナーが集まる兵庫神鍋高原マラソン全国大会、田んぼで100万本のチューリップが咲き誇るたんとうチューリップまつりなど、地域や地区の特色ある風景となっています。



鮮やかな“たんとうチューリップまつり”



空の祭典コウノトリ但馬フェスティバル



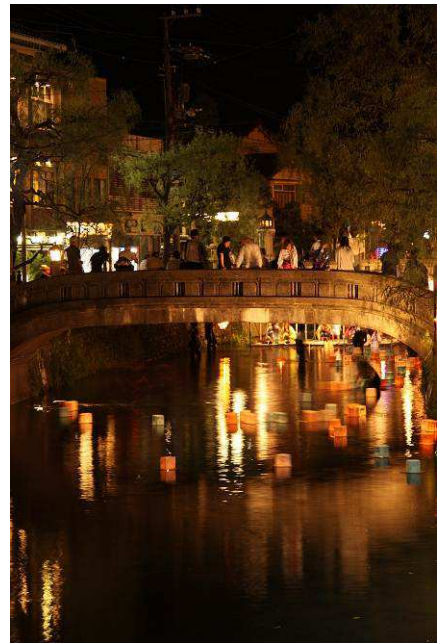
雄大な高原を走る“神鍋マラソン”



貴重な文化の“賽の神まつり”(日高町田ノ口)



愛宕の火祭り(出石町中村)



灯籠流し(城崎温泉)



太刀振り(但東町赤野)



おとう
御柱祭り(日高町松岡)



お城まつり(出石城下町)



鼻かけ地藏尊まつり(城崎町楽々浦)



北前まつり(竹野町竹野)